

이화여대 통역번역대학원 석사학위과정 입학시험

한일번역전공 필기시험 기출 문제(B→A)

次世代自動車の本命と言われる電気自動車（EV）の動向が 変 調を 来 している。少し前まで、脱炭素の救世主のようにもはやされていたが、勢いがあるのは中国勢などごく一部。既存メーカーは苦戦が目立つ。曲がり角に立つ EV の現在地と将来図は。

今月、独自自動車大手フォルクスワーゲン（VW）が同国内の工場閉鎖を検討していることを明らかにし、関係者に衝撃が走った。極めて異例の事態だが、EV に極端に傾斜した戦略が 経営不振の要因の一つとみられる。

ディーゼル車を重視してきた VW だが、2015 年に排ガス規制を逃れる不正が発覚。EV シフトにかじを切り、30 年に世界販売の 5 割を EV にする目標を掲げた。世界最大の自動車市場で EV を推進する中国市場を得意としてきたが、BYD など新興の中国勢に押され、販売台数は大きく落ち込んだ。

欧州の EV 市場全体も成長に急ブレーキがかかる。「欧州では企業が従業員に貸与する『カンパニーカー』が需要の多くを占めるが、一巡した感がある。一般消費者が購入するには補助金があっても価格が高い」と専門家はいう。そもそも各社がエンジン車から脱却し、EV シフトを進めてきたのは、脱炭素社会実現のためだった。

ただ、EV はエンジン車と比べて高額で、これまでも普及の障壁になってきた。価格の問題をクリアしてきたのが補助金だった。今回の失速は、補助金の打ち切りが大きく、中国でも足元は陰りが見えている。

また、かねて EV は、充電設備などのインフラが十分整っていないことや、エンジン車に比べ、1 度のフル充電で走れる航 続 距離が短く、燃費ならぬ「電費」に対する消費者の不安などが弱点とされてきた。

今回の EV 失速の陰で、電池が切れてもエンジンで走行できる プラグインハイブリッドカーPHV や、ハイブリッド車（HV）の販売が伸びていることも、消費者心理を反映している。

専門家は、「環境規制をクリアしていくにはメーカーは EV を普及させるしかない。だが、一気に進むわけではなく、普及しては踊り場を迎えることを繰り返して徐々に進んでいくだろう。一筋縄でいくとは思わないが、市場が右肩上がりであることは間違いない」という。

私はこの夏、訳あって十数年ぶりに車を買った。EV も検討したものの結局は中古のガソリン車に。月並みだが、充電インフラが不安で価格にも二の足を踏んだ。脱炭素への意識が低いと言われれば返す言葉もない。が、これらの不安・不満を乗り越えた先に EV の未来があるのだろう。

이화여대 통역번역대학원 석사학위과정 입학시험

한일번역전공 필기시험 기출 문제(B→A)

顔写真付きでわたしのインタビューを掲載してやろうという酔狂な申し出をしてくださる編集者の方が時々現われ、そのご好意を有難く受けることがある。最近2回ほど生じたそんな機会、写真を撮られることに何のストレスも感じなかったことに少々驚き、ポートレート・フォトグラファーの水準が近頃上がってきているのではないかという感想を持った。

芸能人でもあるまいし、自分の顔を世間にさらしたいという自己顕示欲はまったくない。浮き世の義理というか、メディア世界の「ゲームの規則」と諦めて、撮影に応じるだけだ。だからさっさと済ませてくれと念じているのに、つまらぬ顔を多少見栄えよくしてやろうという親切心からか、ここに立て、あっちを向け、こんなポーズをしろ、いややっぱり場所を変えて……などとうるさく言われ、終わった後でひどく疲れる。

ところがその最近の2回の撮影では、そんな疲労は皆無だった。どちらの写真家も、撮影前からあらかじめその場の空間の構造や光線の具合を熟考し尽くし、最良の構図を思い描いている。和やかな世間話のふたこと、みことでこちらの心を緩め、表情を穏やかにしたうえで、ほんの数回シャッターを切って、それでおしまい。大した技量である。ちなみにその2人の写真家はどちらも若い女性だった。

これは肝心な点だが、2人とも、笑顔になってくれとはことさら要求しなかった。笑みとは内からの衝動でおのずと生じるもので、要求されて浮かべる笑いはことごとく「作り笑い」だ。そして写真をひと目見れば、それが強張った「作り笑い」であることはすぐわかる。

なかには、笑顔の度合いが不満で、もっと笑って、笑ってなどと要求どころか不興げに「命令」してくる人もいる。口を歪めた仏頂面の相手に向かって、笑みを浮かべることが可能だとも思っているらしい。撮影とは撮る人と撮られる人とのあいだのごく親密なコミュニケーション行為であることがわかっていないわけだ。

実際、家族や友人同士ならばともかく、見知らぬ他人に写真を撮られるのは、こちらの心身への一種の「侵襲」行為である。優れた写真家はその「侵襲」性を最低限に抑えつつ、対象の内面にまで入りこみ、そこに潜んでいるものをさっと引き出してくるすべを心得ている。

最近2回、立て続けにして、こういうカメラマンが増えてきたのかと嬉しくなったものだ。同時に、ポートレート撮影はどうも女性のほうが向いているのでは、と思ったりもした。相手の心をさりげなく武装解除してしまう共感能力や柔らかな物言いには、男性より女性のほうが長けているのではないか。こういうのも性差別的な発言ということになってしまうのだろうか。*

이화여대 통역번역대학원 석사학위과정 입학시험

한일번역전공 필기시험 기출 문제(B→A)

大阪に、なかなかのバーがある。「なかなか」というのは、そのこだわり方（本来の意味で）が、なかなかなのだ。なかなかどうなのかということ、居心地が悪い緊張感を強いられるのである。オーセンティックな酒場というものは、そこはかとなく心地よい緊張感がうっすらと漂っているものだが、何かこう、ギスギスとした嫌な感じなのだ。

私の連れが、カウンターの上に小さなバッグを置いた。私もそれは行儀が悪いな、と思い注意をしようと思った刹那、「バッグ、下に置いて！」と高圧的な怒声が飛んだ。常識的なマナーに違反したのは連れなので、店主が言うようにするべく促したが、果たして、店中の客に聞こえるように叱るのはどうなのだろう。内装も重厚で、調度品も何やらありがたみのある高級であろう物ばかり。大人の雰囲気、静ひつな中にも高揚感のあるビジュアルなのに、のべつ店主の不機嫌な振る舞いを見せられることになるので、時間がもったいないと思い、2回で行かなくなってしまった。

京都に有名な老舗のバーがある。私の知人が、アポロキャップをかぶって入店したら、即座にジェスチャー付きで「シャッポ（帽子）、シャッポ！」と叱責されたという。その言葉の選び方に世代を感じるが「客とはいえ、店にも敬意を持って」ということなのだろう。しかし、このご時世で室内での帽子が礼を失するという作法は絶滅しつつあるのではないかと思う。私はどうしても気が小さいので、店に入る時には帽子を取ることが多いが、両手に荷物を持っている時などは、店の外で脱帽するほどのまめさはない。そして、新型コロナウイルス禍の今は、入店する間だけマスクを一瞬着用するという儀式を行うことになる。

荷物の置き方や帽子に対して、何か注意の仕方が違ってないだろうかとも思うが、マナーをたがえたのは客の側なので致し方ない。だが、それとなく「お荷物、お預かりします」「後ろの帽子かけをご利用ください」という案内では済まされず、一旦恥をかかせるというスタイルは、いかがなものだろうか。接客業としてのプライドがあるならば、逆にやりたくないはず、と思うのは私だけだろうか。マスク、検温、手指消毒、これらでまた新たな行儀や作法が生まれるのだろうか。*